

3141
9

雙蝶記一名霧籬物語卷之六

江戸

山東庵

京傳



西 蟻 蟀 枕 床 野 宿 の 妖 怪

去程ふ嘴元動之助ハ復讐の願ひありて。俄ハ行装をとりて古日を
多し。一僕も具を唯独り。色と聲もひ。鎌倉と発足。かゝる旨や
ありん。武者修行のひ。越中園とて出て出た。偕越中園立山乃
庫山小經牙山より廣大なる山あり。根ハ地角小盤。頂ハ天心小樓。遠觀
ハ雲痕と磨斷。近看ハ月魄と平吞。深嶺幽谷の裏常々雲
霧と竹箆で暗る時。山口ハ鳥獸あり。栖多小。獠者寺もあり。半
半山より奥ハ人跡とえて其奥とて。知者あり。比ハ秋の区也。

容易不密事の語まじ。拙者此山奥分登て指子とくうとめりらん。
 可く互ふ立別再會の時いもくく。修行者又耳語て。枯木の枝を
 ひらひ集て明松まつれを。動之助ハ大燧袋と取出し。火と打出しく
 明松ふ燃し。西人これと分ち取。まひふる旨やありらん。動之助ハ山奥
 の方。修行者の麓の方別くお出さぬ。かくて動之助ハ明松と云り照し。木ハ
 下露ハ袖ひして。山深くのありや。径路盤曲し。ひまらるる險阻あり。
 人跡とて。深山をれを。梢とつて。山猿岩間ふとく。鳴前も人あをぞ
 風情あり。狼の吼声ハ山響ふひびきを。ききまじく。聞ゆ。山煙ハ肉ハ喰入て
 鮮血と吸痛ハ堪えん。煙牙山と名づくるも宜也とかりひて。おそくけある
 阻とて。ひ。蒼きあ。き。惡橋と渡さ。て。や。ふ。峯越の。風ハ明松と吹。浦と
 たる。岩根と。ひ。出。る。所ハ尻。ひ。て。や。ま。の。居。る。ハ。松林の裏。より。あ。せ。

一き大男二人歩て出て動之助ハ向ハ雷のおちりくるを。の。声。て
 い。ひ。前。髪。の。弱。輩。を。何。の。為。ハ。夜。中。独。此。山。の。い。や。
 此山の半より上ハ人の上るべき処ハあ。く。見。け。ハ。似。む。膽。ハ。死。奴。か
 動之助此者等と見。ハ。身。材。高。く。眼。ハ。狼。の。下。く。鼻。ハ。野。猪。の。如。く。
 鬚ハ熊の。く。く。の。峯。葉。と。て。編。む。頭。中。と。う。ち。蒲。葦。手。と。ひ。け。
 壘菅の脛中とゆ。ハ。山。刀。の。長。き。一。帯。一。人。の。牙。と。て。一。人。の。鑄。と。提。さ。
 くの者さ。ハ。打。驚。へ。き。ハ。動。之。助。ハ。臆。し。ま。ら。ず。も。見。ん。ハ。山。中
 と夜ハ入。て。独。上。る。ハ。心。得。き。て。多。き。ハ。汝。等。ハ。妨。害。我。手。と。て
 及。ま。さ。ぞ。と。の。者。等。ハ。呵。く。と。ら。笑。い。し。く。膽。ハ。死。奴。あり。汝。等
 手。を。い。は。し。我。く。と。勝。負。と。決。ま。す。万。一。ツ。我。輩。ハ。勝。こ。と。あ。ら。ん
 此山ハ。若。負。ま。活。し。て。ハ。願。す。と。の。動。之。助。莞。尔。と。笑。ハ。我。

⑤ 宿かして名とかのうらむる 化石の銅蓋

萬仞の青壁剣を削り千丈の碧潭藍ふ深き。礎なる蛭牙山の奥深
玉石奇石交て。さび巖とまりひらき。つらつら草屋あり。苔むし
白石樹の青龍の雲と出る小異うらむる。黄瑪瑙の猛虎の風
と起をが如く。わさへ深き谷川ふて。漲音のをきまうく。石鐘乳の時
ぬ軒の冰箸とわやまう。石燕の飛外へ鳥かかえぬ。所るれど住都と
かりふら。篝火とよ此家の娘あつたの留主小唯独灯火小向ひ居て
打手のよむけき。折節来る猿者の昼狐の鬘四郎あつたの留主を
見こみめて。簀子の上のの上。さうする声とひひる。こ娘夜々仕度
とらりあきて。こちらのつゆの剛りま。わさ花と此様ふ。深山木小
朽まらる便きま。折く来てつゆ如く。こちらの心ふあさがる。此山を連て

退都の花とかがむ。氣得心うらむ。つひつひしくと奇そ
突倒し。わかげら。母さぬの留主とくも。来て嘯王妻とせり。うら
さ。母さぬ小告ささえ。辛月と足さるぞと。つゆと聞ど又さう奇て様
桿と接やう。身あつとせし。娘へわらうさうおのひ。持衣の杵で頭と
ら。と打退る。鬘四郎へ頭と打とて。立ち。手負猪狼のよむ
と。と手捕ふも。男うれど。哀るればこそ格のやうにわらう。わら
我の夏とつゆのぬ。報少此家のわら。雲根の老女のあまき仕業を。
縣司小告ささえ。やうて憂目と足さるぞと。立ち。引とら。これと
告てよむ。ま。さ。ぬ。さ。ら。う。け。の。ま。な。ま。人。と。い。ふ。娘。の。口。ご。の。口。ご。の。口。ご。
さ。さ。さ。の。ゆ。く。と。い。ふ。れ。て。娘。の。胸。小。釘。為。産。を。わ。さ。ひ。き。母。小。告。い。ふ。ま。ま。さ。
心。ま。ま。め。て。笑。顔。と。つ。ら。さ。ら。う。深。く。お。わ。を。心。と。無。解。小。聞。ん。心。心。

越前國石川郡
中野山石奇洞



又此言種之



又此言種之

戸とさけべ娘ハ腹立一けふ立上りて歩出戸と引わけて月ありふ助之
 助の容と見れを玉とわびむくをりふ美麗若衆るれば忽眷戀の心と
 起して心頭突々と跳あつめとせむと打まひり居るが。あがりありていひな
 主人の留主とのひゆあわりて人と宿一がくおれど。押ん身あつて玉が
 命ふりえても宿一とわひひをるる。いふ多くといひつ。手と取て裏ふ迎
 るあぞ。動之助ハ身上の塵と打払ひ脛巾とこさ草鞋とゆふなど
 まれば娘ハいそりく算の水と石の鉢ふ汲入て足とわへ。何やあん
 黒き石と田畑裏ふ打てて火と燃一。此ハ深山中多ふ寒さをも平の山
 初秋されど月あふとく妻ハ綿入と着るなりおん身ハ夏衣るれを寒さ
 堪あらず。いふ火あわちて身とあつめあつ山ハ踏迷ひひさかひびり
 ありせん飢とあまひつらん。いふ石山すく辛菜一房にり得

ざれをもち参まき物も。さそこれありとりあつて。折敷のくみ白
 糸のやう物と盛て出。動之助ハのさりのわ川まで謝一之と食ふ
 少一甘味ありて忽飢と忘。これハ何とる食物ぞと問。く娘ハ
 他ふるさ物るれば知らぬと直也。さる石麩といひて此わりの岩窟お生る
 物を我く。平日の食なりとふ。動之助ハこれと聞よしく見れば折敷
 石るれば益のう家内とわらふ。砧の腕首と石で。火桶灯臺糸車麻
 笥。銅釜の蓋播櫃播盆切机のさひの雑具。まて皆石なり。其うらふと石の枕ハ
 昔語のいっ家とらひ出しを。おまはるれば。轉りて其ゆか問。娘ハ此
 処ハ玉石奇石われば奇石ハ洞とがら。かゝるる。谷底ハ川あり。らけ乃
 物と其川氷のひけけおのぐ。石ハ化とゆふ。化石谷とらげぬ。妻ハ家の
 雑具まて石る。皆ハ谷川氷のひけけ石ハ化とゆふ。まてこれハ万の物なり

きて破損するゆゑなを。今炉火は焼くへ者炭なり。此灯火は燃石とて
 よく燃る石なり。明松のくろくもして燃ゆとふぞ。動之助はこれと聞きて
 おもふ化石谷といふ此処にその石とやうく不審なれども。まへ娘は振袖乃
 袂と口ふく。背後きふよりそひて。いともうけいひも。いけの園や
 京の女郎田舎の女郎とも石と何じ。都の花の京女郎も。深山木の田舎
 女郎も心の實ふ二ツあり。女子の念へ岩ととり。その男もよふて
 石ふともと聞かざる。日陰の木ふおろそ。石ふ花咲谷とあり。岩間には
 清水ふも。月影はうろぞ。一河の流れも他生の縁。今夜お宿といふとも
 深きえりとかげきと。心の裏とやのほし人お別れは。おもしん。顔は紅葉
 の木の葉石。磨わける水晶ふ緑とびと。額髪をけるも。白ふ口紅。顔の中の
 珊瑚砂。顔ふ袂の隔垣ま。初戀の咲も。花の石梅ふ。色と合て

動之助へ娘が戀と幸ふ此家の様。子どうのぶなや。心ふおどろ。落花
 小心おれ。流水ふも情あり。まがらふおかりひ。まがる志ま。くわぶおかり。むと。
 靡わゆる糸薄ひとろふ。落る白露ふ。濡の緒。わらびぬれた。娘はうら。さ
 動之助が手と取て。一間の裏ふとも。ひまぬ。ひて時刻も
 やらう。山風いと烈く。吹渡る。此家の主ハ雲根とくる。老女も。雪と
 わさむ。白髪と肩ふ打乱し。く年より。女蘿の古松ふ。ひま。下。さ。そ。
 面ハ節木のやうふ。おびる。石綿とふ物とりて。織する衣の裾を高く
 かけ。ひし手。おびる。引ふ。獵箭と。握り。ま。え。ひ。手。お。免と。提老を
 見。さ。る。健。さ。谷。の。險。阻。と。の。がり。つ。家。路。ふ。飯。り。門。首。より。娘。今。ふ。じ。ぞ
 娘く。と。ふ。か。え。た。か。火。一。間。の。裏。と。走。り。出。へ。い。り。と。お。ん。り。の。を。や。じ
 と。久。た。今。夜。ハ。山。風。さ。が。死。や。多。ふ。鹿。も。措。も。驚。き。走。り。て。手。お。わ。る。を。化石谷の

泥九郎。山蛙の如く太。兩人ひくくひる。先刻此山の半途。そ旅の若者
不出の矛と鏢を戦て試つ。劍法と精熟。まも早業。そ我
敵一が死ぬ。這々逃退ひり。彼奴唯者。とらんれど。此一註進仕ると。
ひふとわきて。声高ふりのひか。其若者。此方ふ。あおきね果して。我推量
よか。をひく。足利方のま。者れ。まひか。我彼奴。と今夜の中。打
る。ま。若打り。ま。かの破造の亭坐敷の軒口。小釣。か。磬不
と打。れ。其方。て。貝石の螺と相。合。吹。合。かの活道。と。え。りて
打。と。若。又。死。地。ふ。入。べ。か。の。う。う。死。と。く。手。と。ま。ふ。あ。ら。ん。又。此。方
よ。て。打。と。ひ。合。と。あ。ま。か。の。相。合。と。あ。ぐ。ま。で。此。通。手。下。の。者。曾
小。残。ま。く。ひ。聞。ま。と。耳。語。べ。兩。人。の。者。へ。打。と。ま。早。足。と。出。し。と。ま。ぬ。
老。女。へ。門。と。う。ひ。あ。石。の。か。と。取。出。し。て。腰。お。あ。び。灯。火。と。吹。消。て。杖。足。し。つ。

亭坐敷。歩。ま。う。梯。の。う。ふ。二。足。三。足。上。り。ま。い。か。娘。か。目。と。醒。し。を。以。定
妨。ま。を。れ。た。宿。鳥。と。ま。ま。あ。ま。と。と。巖。下。下。り。床。の。下。ふ。ら。ま。入。石。の
刀。と。引。抜。て。突。上。る。簀。子。の。う。ふ。あ。る。や。ま。け。よ。声。り。ら。と。ま。流。る。血。を
仕。ま。ま。う。う。と。あ。り。ひ。つ。い。せ。ば。し。く。梯。と。上。り。明。障。子。と。踢。放。し。て。月。影。小
ま。ま。あ。り。ひ。も。ま。ね。手。下。の。獠。者。昼。狐。の。髭。四。郎。朱。小。流。り。て。の。打。つ。
旅。人。と。娘。も。居。極。を。ヤ。と。り。逃。せ。う。う。年。ま。ま。と。ひ。り。と。し。う。て。用。意。の。雷。推
と。取。上。て。掛。お。く。相。圖。の。磬。石。と。打。ん。と。や。ふ。屏。風。の。法。より。娘。の。下。火
走。出。其。手。ふ。ま。り。て。と。む。れ。た。老。女。眼。と。り。し。つ。ま。て。お。色。小。迷。ひ。て
かの若衆。と。逃。す。か。あ。く。ま。奴。と。と。放。さ。と。突。倒。し。て。又。も。打。ん。と。踏
出。も。足。小。倒。れ。あ。ら。取。つ。ま。て。手。弱。き。力。小。ま。し。娘。老。木。の。松。小。藤。波。の
ま。ま。ひ。つ。ま。ま。娘。の。声。と。あ。ら。ま。こ。れ。母。ま。ぬ。妻。が。い。と。と。聞。て。是。日。来

此身のわき業此業迷ひ来る旅人いとあまき。剛臆とらうそ強者の味方又
 子。弱者ハ打て捨又剛われも味方つて瓜うけひふれを手下の者ふひつけ
 道とさまり殺さるゆゑ非命ふ死と者幾人とも教をれを其惡報を
 此身ふひるれと平日不妻か諫れども聞入らぬ無得心先刻此鬘四郎
 が妻ふらやれ得心せむ母人のありき仕業とさるといひゆりて
 うりのまゝ体ふりてはさる瓜実とさひ。あひ来つる瓜幸ふ相齒ふは鹿笛
 吹おびたを彼旅人と入らぬ。此身の言ふけきりへ。訴人の難とゆらん。あ
 旅人と逃ゆれまらる色不迷ふあは生さる若人と殺しゆのつていへく。
 二の中母人不罪つらうをいへるあり。此のころと聞て其相圖の石をうさむ。
 何とぞたすけまられ。泣くよを老女益怒りて家我心大望あり汝等が
 知まふあはだ。彼者と逃して。我家の指子他ふ漏て。大望の妨とあはれた。

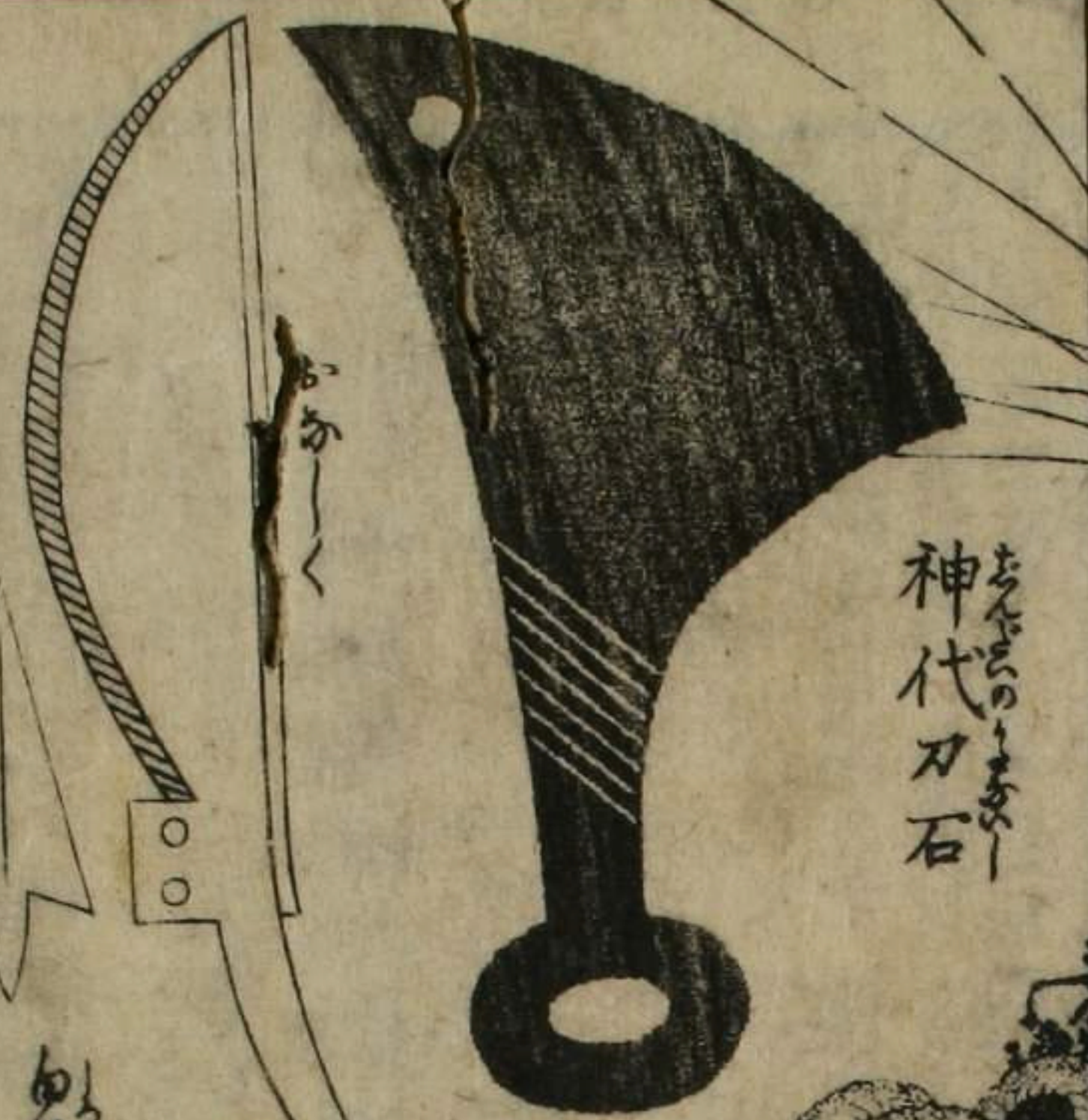
下とらるゆんたるを。故せくと何うそふひまふ。鬘四郎起上る痛手不
 屈せぬ強氣者さて。我とあのかせへ殺さるるありし。あくさもゆけいよ、
 訴人ふらむと。いひつ岩下不飛下る折しも下不血平太泥九郎兩人
 ひとく来ゆりまらぬ。老女へ上より声とゆけ。心變の鬘四郎それ打とけ
 下知とれハ二人ハ心得ゆけ。あはく石の刀と抜て斬つけまらふ。深
 手不廻らぬ鬘四郎あはく刀と抜放て。二人と相手不打合ぬ。老女も
 益氣とゆら。取つ娘と突退て。磬石と打鳴。忽四方不吹立る石乃
 螺山響音高くひき合ていともまらく聞えて。遙ハ山間谷間不許妻
 の明松ゆたてつらなる星乃如くなら。娘ハ四方と見渡して。獨氣とや
 身とりて。案内もあはぬ此山中のや道くともなれて。彼も方へうた
 らも打て。あはく。數く涙のひまらも。圍とさ退くも。相圖を

の秘で聞かば、（一） 此方へ向け下埋火と外の方へ持のせて
 曲玉壺（二） へさくさくする。虫砂と掌へ握て火桶のうらへ打入ると火氣（三） 不
 びの虫砂空へ高くのびる。相圖（四） と合も螺の音もや。明松の光も
 漸々不消（五） へぞ娘へやうく安堵して。胸抱（六） ちるを時しとあれ何りの
 ともあれど、巖の陰（七） へあうくれ出て娘と捕へ口とあえて小服へ抱
 行方（八） ぞあれどなりぬ。老女へこれと露（九） ちるに螺の音や。明松浦（十） と
 びかりつ。ちり磬石（十一） とつけ打へ打多め下の方と見あらせ。血平太泥
 九郎（十二） の兩人（十三） 此四郎（十四） へ斬立（十五） らし。いと危く見えなれ。老女へ雷槌（十六） を
 うけ捨てて大きき吸針石（十七） と取上つ。此四郎（十八） がなうくふあふひて上る
 これをつらひふふ。血平太泥九郎（十九） の兩人（二十） へ石の刀（二十一） 此四郎（二十二） が刀（二十三） へ常の鉄刀
 きた。吸針石（二十四） の氣勢（二十五） へさうらして。刀の手の裏（二十六） 在小野（二十七） と二人（二十八） の者（二十九） 得（三十）

とくまをひけて斬（一） つけられ。此四郎（二） へつひ打（三） して死（四） して。此四郎（五） へ
 別人（六） へ是則前（七） の月餘吾郎（八） へ住家（九） の竹林（十） へふのびて餘吾郎（十一） と打（十二） んとする
 堂左衛門（十三） が僕（十四） なる。原（十五） 撥者（十六） ありしゆ。其後（十七） 又此業（十八） とて。雲根（十九） の老女（二十） へ手
 下（二十一） とし。鹿笛（二十二） の音（二十三） へあむひれて殺（二十四） され。小（二十五） へ妻（二十六） 鹿（二十七） と数多（二十八） 殺生（二十九） する
 報（三十） へ。去程（三十一） へ動（三十二） 之助（三十三） へ。火（三十四） が情（三十五） へうて危急（三十六） とぬ。色（三十七） を背
 負（三十八） て彼家（三十九） と逃（四十） 出。明松（四十一） へさくさく娘（四十二） へさくさく。夜光石（四十三） との物（四十四） へ我
 身の四方五尺（四十五） をひくと。外（四十六） へ見れ。光（四十七） へ折（四十八） へ。月雲（四十九） へさくさく
 暗（五十） へ。石（五十一） と以て道（五十二） と照（五十三） して走（五十四） へ。恰（五十五） 白昼（五十六） を白く如く
 なり。又娘（五十七） へ教（五十八） 多（五十九） 小（六十） 是より東（六十一） の方（六十二） 遙（六十三） 先（六十四） へ路（六十五） 二條（六十六） あり。一條（六十七） と死地（六十八） と号（六十九）
 一條（七十） と活道（七十一） と号。瑪瑙（七十二） の巖（七十三） 聳（七十四） へ。方（七十五） へ則（七十六） 死地（七十七） あり。是立山（七十八） の地獄（七十九） へ
 三稜石（八十） とのひて。劍山（八十一） の如（八十二） き巖（八十三） あり。行（八十四） くとわらふ。水晶（八十五） の巖（八十六） あり



鐵石



神代刀石

醉醉軒
山月古柳画

野曝石
石面に
人の足
あつた
のさちわさ
の



小泉
左
右
伊
野
刀



夜光石



蛇石



霹靂石

磬石



燃石

三稜石



石女



蟹石

又此言...

陸より歩み出動之助と南餘兵衛とぞう打ふと斬つけり此方乃
二人へも引く身とひ移り動之助へ血平太が首ととろりと打か
南餘兵衛へ泥九郎と腰車ふ斬放し兩人一度ふ刀とぬぐひて鞘ふ
るが南餘兵衛動之助ふ對てつと主人庄司おん身ふまゝとて
ありとまうさしれ一且假名寺かりて涉對面わどりとつ時已東
山鴨鳴さるれを四人ひとく麓をさしてぞ下りる

○前庄司南餘兵衛ふ對し深山の濕地とつと遠く音と発せ
叫子笛とつれ他日おのづからある時わどりとつれ果して此時
用とらぬ

夫かりつとて頓てつと鶺鴒養の腹切
其磧磧と翫て玉洲と窺る者ハ未驪龍の蟄所を
知む其弊邑お習て

上邦と視る者ハ未英雄の纏所と知むとつと兵都賦をかりつと越乃
中國煙牙山乃巖と背後ふり亀毛川の流ふをひ兎角とつと村中
閑作とつと鶺鴒養あり頭ふ雪ふ戴と面ふ朱とつと古来稀多七十歳の
翁とつと岩疊作王營業ハ朝暮小亀毛川の鮎とつと唯殺生と古と
して波の滴の腰蓑小露の命とつと舟船鶺鴒舟ふとつと篝火乃消なん
後の閣路を走更ふりぬ罪業ハ日々深くもつと柄のひとふ幾年と
経とつと大木の古松あり空ふ注連とつと様子ありけふもえんけを
比しと七月盂蘭盆の時とつと盆中ハ殺生の業と休と靈柩とつと
あつと菰筵小杉の葉垣茄子の牛の馬の箸小土器と土とつと人の
為浄土の風小瓔珞のゆくとつと如く掛渡と栗穂稗穂小青匏瓜濁小を
蓮の葉と露の手向とつと不村中の鶺鴒養等ハ招小寄つとつと

靈柩の前小圓居して百万遍を繰念珠の手つきも常小手馴する。鶉縄
さくさく如くなりあとの閑作音頭取発願以至心飯命阿弥陀仏念仏衆
生接取不捨と鉦打り一越調の声もあがる小屍風小押散も追分繪乃
鬼の念仏小異る。老も若き打交て調子ちひの六字誥の巖小む谷川の
黄瀬奥の声もさくさく。尻声のうた責念仏の松の嵐小鳴交る秋の蟬
いとわやまる。欠まど系退屈の念仏と奥齒小嚙くさくさ。ゆきもゆきも
これこれ願以此功德平等小。わどやととと。鉦打り念珠取らるて
閑作皆く小打向ひ。闇と好く鶉養のさくさ。月の半八月夜も小珠盆乃
中へおれしく休と幸ひ明の十五日冥日小わする亡者がある。今日の待夜は
志乃百万遍とつとつとさくさ。心むらりの蓮の飯新酒をさくさ。おれして
さくさ。おれさくさ。盆中の鶉籠とひらき。鶉籠小も楽とさくさ。罪むらり。

こちこち盆が骨休り。群跨ると寝もさくさ。心むらり。打らるさくさ。語りあせ
しつひつ。地獄の釜の蓋のけて盛と蓮の飯薄き新酒の磁罈酒精進
者もさくさ。遠慮會釋とさくさ。居る鶉養等。餅宜挨拶も
さくさ。小施餓鬼小あひさる亡者の如く。或は食或飲咽小はさくさ。ひせ
さくさ。鶉養の罪とかりらぬ。ゆて漸時さくさ。暮影小鳴晚蟬も
野辺の鶉小音とあがる。芦花の風雪と散り。残螢の光灯と點して。日も
さくさ。暮るる。鶉養等。あまき食い。酔る。我家小飯さくさ。さくさ
此閑作さくさ。下男小崩葉の具呂藏とさくさ。のあり。此時船小橋さくさ。て
飯さくさ。岸の柳小船と繫權とさくさ。ひて裏小入訛声して。最早念仏もさくさ
まさくさ。おん身独でさくさ。さくさ。わさくさ。今夜の空小雨さくさ。さくさ。さくさ
船小もさくさ。さくさ。さくさ。閑作。噓々それさくさ。さくさ。高燈籠もさくさ

家内小薰ト世常々なる香るん心。開作二間の障子と細目小わけの
 香の薫と訝む。ある折しも蛭牙山の雲根の老女此門首小来かき
 これも香氣と不思議おほひ。處に窺居すし。何れ心ふうあつて家の
 背後あぐり去修行者の回向と終鈕と打ちしれ。開作二間と出て
 修行者の側近く寄。今お身の手向あひ。各香ハ楊貴妃の身指
 との香さしやと問えれ。修行者いづく。いふも然り。彼香とさき知
 する和全の素姓ハ何人そやと問え。開作いづく。先おん父ハ素姓
 とあるん。其より我素姓と語え。いふも修行者威儀とて
 ろハ我実ハ相模次郎時行殿と守育。大仏九郎貞直が一子なり。と
 せざる。延文四年。信別苦形落城の刻戰場で出生し。是に育ち。若
 物語より。父貞直打死と聞え。存亡疑へん。若活きて此世ハ

あつてさるるわづら會ことりや。修行者小身とや。諸國とわづら。開作
 ろハいよ。此家小祭る亡父の位牌さる。打死おまきまじ。と云ふカ。落果て
 む。き位牌を拜度より。薄き親子の縁亡父と祭る此家のあや。必
 所縁の者あつて。探んさる焼る香ハ亡父の遺物此香包と
 見。いよ。出せ。開作ハ是と見て打驚き。いよ。先これと上坐に。と
 て両手とつ。さる。戰場で生れ。若君。今何とつ。いよ。開作
 ち。いよ。拙者ハおん父九郎貞直君ハ仕下郎寺奥洲劍太さる。者
 ら。いよ。今夜わづら。あひ奉る。おん父尊靈の道守あふ。いよ。おん父
 君ハ知具麻川ハ入水して。底の水屑と成る。明ハ冥日今夜ハ待夜過
 昔とわづら。出せ。いよ。やと。拳とあがり。いよ。修行者ハ落涙。い
 ころ。いよ。詞。開作。いよ。壁ハ耳わ。墻ハ縫。いよ。

まらむと。端近ふて人物語り多し。いづまんと案内して。奥の二間より
つらひぬめて。初更もやもだて。雨雲の暗間よりいづ月影乃月波
てらも岸づらひ小荷とあつひて。心太と賣商人歩来つ。此家の門辺より
荷とあつひ心太はりきりきり入てぬ心太の曲突とのぞきなり見せまらむと
声さやうふひいれ。此村の鶏養等寄集心太の曲突しんりし。商人
いそのぞき見るべしと取りとる。商人の嘆しつ。を我高心太ハ伊豫の國
宇和島の名産なり。漢名ハあまあり。和名ハ古留毛波又くらわてい
ともまらむと由き。こころてんともまらむら「孟蘭盆乃向々の秋の夜も
まらむ。月小もまらむや我あらうてい」と詠る歌しんりし。今がりの商人
物小もひやふりし曲突とのぞきなりいづく見せまらむとつらひぬめて
空の高く突あつて。四坏小受留或背後さぬ小突て肩と越え或突く

股とくらせ。或ハ突上て落る処と箸とを扱かど。いろくさめど
曲と尽して見せられた。鶏養等ハ奥小入さてもかりあき商人をか
つらひぬめて。我もくと心太とうち食錢とあつて立去ぬ折し。川風颯と
吹て閑作ガ魂棚の灯明と消え暗まらぬ。彼商人四辺と見まらむのび
入て魂棚小を裏あつて位牌と奪ひ懐小入て。荷とあつひて行方
まらむとつらひぬめて。時小庭の苔井の裏より。大蛇。蠱。出て。鶏の鳥
の雛とくら傍辺の古松の空小入んとせり。忽地上小撲的あつ。のさうり
まらむ死て多。彼修行者ハ一間の障子と押わけて。眩しむ。此体を
見居し。わの空とこそ怪れと心小あつて打うかづき。松のげらふ
よらんとせし。閑作ハいそ死まらむて走らぬ。わらふ小まらむてか
きてこそ偽者観念せよとよらむ。一腰と抜放て斬つた。修行者ハ

又此言...

七二二

言三

錫杖とりのりて丁と受留又斬つるに受まゝ。裏ふ仕籠一ノ刀を
 抜し丁々まゝ打合ぬりて多時崩繁の呉呂藏へ買物とてのりて
 家路ふ飯る其跡より。以前の商人抜刀と背後ふりて秘するに。全
 肩尖のぞき斬つるに。呉呂藏へ身とひびくしてこれと避酒樽を投
 捨て權ふ仕籠一ノ刀と抜松へ退引ハ入来往去回の秘術を尽し双方
 おもむね蝸牛の角裏を閑作修行者互ふんびく死双の音外方めん
 呉呂藏商人の火出るをりふ戦し。何るひん呉呂藏の巖の上ふり
 上りて川ふびんぶと飛入つ。抜手とまりて游ゆ。商人の岸つるふ跡と
 みるひて追去ぬ。修行者の閑作の電光石火とひるるを。刀の光の眼
 くも勢。氣とのまれ。劍法乱して敵し。く。とふ行をうんえとる
 びく足と踏とる。門ふ立も高灯笼の引綱とてと斬れ。灯笼の

